

水色のジュン

中島信子 作

依光 隆 画



913.8	なかじま のぶこ
	水色のジュン 中島信子・作 依光隆・画 東京 岩崎書店 1980 165ページ 22cm (創作児童文学17)

創作児童文学 17

水色のジュン

一九八〇年十二月十五日発行

作者 中島信子

画家 依光 隆

発行者 森山甲雄

発行所 (株)岩崎書店

東京都文京区水道一丁目九番二号

〒112 電話 〇三―八二―九一三二

振替 東京七―九六八二二

印刷 新興印刷製本(株)

製本 河上製本(株)

コード番号 八三九三―九三二七八〇―〇三六〇

創作児童文学 17

水色のジュン

中島信子 作

依光 隆 画



岩崎書店

もくじ

1	ジュンが助けた少年……	6
2	三歳 さい のままで……	20
3	少年になった日……	32
4	野犬 やけん に追われて……	40
5	女 おんな 三 さん 四 し 郎 ろう ……	52
6	戦 たたか わないために……	64
7	コンクリートの家……	76



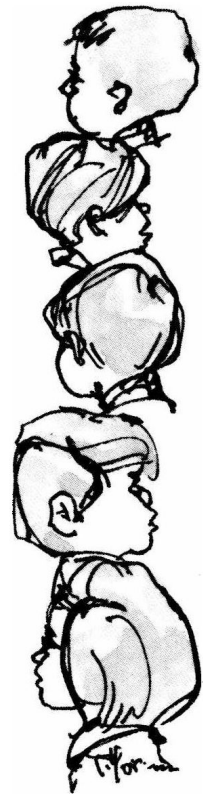
8	くらやみの戦い ^{たたか} ……	87
9	心開く日……	97
10	家庭のない子……	108
11	開かない口……	121
12	心、溶ける ^と とき……	151
13	ジュンと洋 ^{ひろし} と……	159

●表紙・口絵・さし絵 依光 隆



水色のジュン

1 ジュンが助けた少年



遠くだまってそびえる丹沢^{たんざわ}の山々も、白く塗^ぬられるのは、もうすぐだ。秋というのに、坂道にユラユラとかげろうが燃^もえている。団地の上から下まで、三百メートルも続くなだらかなこの坂道を、ランドセルをしまった子どもたちが、上に下にと散^ちっていく。

坂道の東側^{ひがしがわ}には高さ七メートルもあるコンクリートの壁^{かべ}が、団地につづいている。西側は開けていて八メートルくらいのがけになっている。そのがけ下に、大蔵^{おおくら}小学校がある。ゆるやかなカーブを描^{えが}く坂道のまんなかあたりに、下へおりる階段^{かいだん}があり、その下の道に小学校の裏門^{うらもん}が面している。その階段を登りきったところから、わいてくるように子どもたちが坂道を上へ下へと帰っていく。階段から団地に向かって右側のところに、アスファルトの道からそれて道幅^{みちはば}が車よけのように広くなっていて、小さな空き地^{あきち}ができている。この部分は、がけにせりだしているし、空き地をかこむようにプラタナスの街路樹^{がいろうじゆ}が植わっていて、空き地のところだけ注意しないと、校庭からは下校する生徒の歩いていくのが、よく見えない。空き地の向かいの坂道をへだてた団地側^{がわ}の擁壁^{ようへき}の上には、大きなけやきが三本、枝をひろげていて、団地側からもこの部分が見えにくい。その死角の部分に、五対一に分かれた六人の少年たちが立っている。

「おいっ！ あとか、いとか、いってみろっていうんだよ」

団地側に背を向けた五人の少年たちは、学校側に立つひとりの少年をおどかしている。Cマークの赤い野球帽の少年が、小さくまるまってる茶色のセーターの少年の肩に右手をかけ、こづいた。五対一では、どうやっても一のほうに勝ち目はない。まして、こづかれた少年は、言いかえすことも向かっていくこともしないで、ジッとあらしが行ってしまうのを待っているようだ。

「おい、池上よー」

青いジャンパーの少年が、肩をいからせてつめよる。ひとりぼっちの少年が、おびえたように数歩さがった。そのとき、

「ちょっと、ちょっと、まって、まってえ」

道からつきでたその空き地に向かつて、芝生が植わったがけを、ななめにかけてあがってくる子がいた。水色！ セーターも半ズボンも靴までも水色づくめだ。

「まってよ、弱い者いじめをしているんじゃない？ 五、六人でかたまってる、なんか、ようすがへんだけど」

いじめる側の五人の少年も、ひとり、ふるえていた少年も、ふしぎなものを見るように水色づくめの子を見ていた。

「水色のジュンだ！」

五人がそろって小さくさげんだ。

あつという間に「水色のジュン」と呼ばれた子は、やわらかく笑いながら、五対一に分かれた少年たちのまんなかに立った。あれほどの勢いでがけをかけあがってきたのに、息が荒くない。ショートカットした髪と、丸く大きな目、小さな鼻、白い歯、そのみんなが光っている。

「校庭のほうから見てたのよ。やっぱりこの子いじめてたのね。ジュンがきたんだもの、このあとの相手はジュン。だいたい五対一なんて、男のけんかじゃないわよ。女だっていやだなあ」

へ女だっていやだなあ」といったあと、くちびるの右側をキュッとまげて笑った。その横のほつぺたに大きなえくぼができた。

「女のくせになんでえ」

水色のジュンは女の子だった。黒いチョッキの少年が、半ズボンのポケットに両手を入れて、ペッとつばをはきながら言った。

「女で悪かったわね。女だろうと男だろうと、ジュンは弱い者いじめはきらいなの。だいたい、きたないじゃない！ 大人だって、子ども五人にかこまれてつかれば、気味悪いわよ。ええ、その赤ヘル君！ 広島カープの古葉さんは若さと清潔さで売っている監督さんよ。チームだって日本一を達成して、ますます強くなっているのよ。おやまあ、君のマークは巨人ね、君ねえ、いがわ君のように、きたない大人になるつもりなの。それじゃ、女の子にはもてないから」

五人の少年たちをのぞきこむように、順番に見てゆく。のぞきこまれた少年は、ジュンの大きな目が意外にするので、思わず一歩さがる。五人をにらんだあと、ジュンは背筋を伸ばしてすくと立ち、右

手の人さし指で鼻の下をこすってから、にっこり笑った。

「さあ、だれから勝負する？ いいのよ。どこからかかってきたって。何人だって相手になってあげるから」
最初、五、六人の子どもたちが、ジュンたちのまわりをかこんで、見物していた。

「おい、女三四郎」じゃないか」

「あっ！ 水色のジュン」だ」

数人の子どもたちが階段を登りきったところからかってくる。

「あーあ、ジュンちゃんみたいに強くなりたい。そうすればスカートめくりする男の子なんか、すぐ投げとばせるのに」

けんかに関係のない子どもたちが、一人一人、ためいきをついている。

「五人で一度にかかれば勝てるかもな」

身体からだの一番大きな、青いジャンパーの少年が、他の仲間をさっと見ながらいった。

「そうよ。五人で一度にかかれば勝てるかもしれないわね。さあ、どこからかかってきたっていいのよ、さあ」

ジュンは、両足をすこし開いて、両手を胸むねのところでかまえ、身体全体をすこしなめにして、受ける体制を整えた。いじめられていた少年は、ジュンのうしろで、なるべくけんかにかかわらないよう、下を向いて、小さくなっている。

「なんだ！ なんだ！」

見物の子どもたちが、ずいぶんふえてきた。坂道の脇の小さな空き地のまわりは、わいわい言う声であつてしまつた。

「おーい、空とぶ円盤でもおりたのかーい」

「ちがうよ。人がバツと消えたんじゃないの」

「こりゃあ、パニック状態だよ」

ヤジ馬の子どもたちの後のほうは、輪の中心のけんかがよく見えない。口々に、テレビや映画で覚えたことばでさわぎたてている。

「ほーら、どうしたの」

ジュンは、だまりこくつてジュンを見つめる五人の少年に、挑発するようにまた一声かけた。少年の一人の頭の中に、ジュンが巴投げの名手だとか、こんな身体で大きな大人を投げとばすとかという、そんなうわさがかけめぐっていた。ジュンは、おでこに落ちてきた前髪を、じれったそうに、さっとかきあげた。

「カッコいい、女三四郎！」

「がんばれえ！ 水色のジュン”さまー”」

ヤジ馬の子どもたちのかけ声を合図に、ジュンは、赤ヘル帽の少年の前へ一歩ふみだし、するどい視線をあげる。

「ヒエッ！」



にらまれた少年は、カエルがふみつぶされたような声をして、一歩大きくさかった。

「ワハハハ、負けガエル」

どっとヤジ馬が笑って、ほんとにカエルみたいにさがった少年をひやかした。

「おーい、なにがあって笑ったんだあ」

ヤジ馬の外側のほうから声があがる。

「大きなカエルがね、一歩うしろにとんだのよー」

ジュンが、声をかけてきた方向に答えた。ジュンは、五人も相手にしようというのに、心の底から落ちついているようだ。五人の少年に（これはもしかして、五人で一度にかかってもかなわないのでは）という、弱気な気持が走って、ブルツと身ぶるいをした。たったひとりの女の子にバカにされながら、それぞれ、男のプライドがうごめいて、となりの仲間（なかま）に腹（はら）を立てている。

（チェッ！ いつもいばっているくせに、こういうときになると、力が出ないのかねえ。身体（からだ）ばかり大きいくせして藤原（ふじわら）は）

（鈴木（すずき）のやつ、剣道（けんどう）習ってんだらう。〃水色のジュン〃ひとりぐらい、「お面」って調子でやつつけられないのかなあ）

（勝てるよ。オレたち五人の心が、がっちり一つになれば）

五人が五人とも、心の中では、おたがいを非難（ひなん）していた。ジュンの目が、あのスプーン曲げのユリ・ゲラーの目のように見える。

「お、おれっ！」

とつぜん、黒いチョッキがくるりとうしろを向くと、そのままヤジ馬の子どもたちの中にとびこんで、
「いちやめたーっ」

と、子どもたちの輪の外に出てさげんだ。残る四人を裏切ったわけだが、たとえ水色のジュンといえども、女に負けてべそかくよりは、ずっとプライドが保てると思ったのだ。

「信じられない。おれたちを裏切るなんて」

巨人帽の子がつぶやいた。このことばが残った四人をどうしてそうさせたかわからないが、四人ともいっせいにうしろを向くと、ヤジ馬の中へとびこんでいった。

「けんか、やめちゃうのー」

ジュンのほうがおどろいた。四人の少年は、ヤジ馬の輪をぬけて、坂上に向かって走っていた。ジュンの前からにげだした少年たちの心の中に、ほんのすこしだけれど、笑うとひな人形のようにかわいくなるジュンへのはじらいがあった。

ジュンは、にげた少年たちの姿が見えなくなると、肩をすくめて、まわりの子どもたちに笑いかけ、それから始めて、くるりとうしろを向いた。

「いよお、池上君とやら、水色のジュン」さまに、ブチュッ！とやったら。助けてもらったんだもん」ヤジ馬の声に、池上君と名ざされた少年は、なお背をまるめて下を向いた。

「そうだよ、そうだよ、ソースだよ。ちょっとだけでもお礼をいったっていいんじゃないかなあ」

まったくヤジ馬は勝手なことをいう。ジュンまでなんだかはずかしくなって、ほったが熱い。

「ね、どうしてけんかになったか知らないけれど、わたし、そうそうタイミングよくとんでこられないわ。けんかなんかしちゃだめじゃない」

ジュンは、少年の肩にやさしく手をかけた。

「ジュン、その子に話しかけたってむりよ。ほら三組に転校してきただんまり屋さんって、その子だもん」
いつのまにか、ヤジ馬の子どもたちをかきわけて、ジュンの横にジュンと同じクラスの下田とき子が立っていた。

「池上洋……」

ジュンは、顔も見なかったことのない少年の名を呼んだ。ジュンが他のクラスにはいつてきた転校生の名前を知っていることはめずらしいことだ。しかも、男の子の名前を知っているとは。だいたいジュンは、男の子にはちっとも興味なんかなかったはずだ。

「二組の相田君ってステキ！　ちよっと目のあたりが、ジュリーに似てると思わない」

「あら、渡辺君のがいいわよ。大きくなったら、草刈正雄そっくりになるわよ」

女の子たちが、ジュンの肩をつついては、ジュンをどうにか男の子たちのほうへ向けさせようとするのだが、ジュンには、男の子はどの子も同じにしか見えなかった。

それほど男の子に興味のないジュンが、池上洋の名前を呼んだのだ。

「へえー、ジュンが男の子の名前を知ってたなんてねえ」

とき子が、おどろいたようにジュンをのぞきこんだ。

「ちよっ、ちよっとね、みんながよく話している子だからよ」

ジュンは、とき子にさぐられるような目で見られて、あわてた。

「ほら、よく言ってるでしょう」

ジュンは、そのあとのことを、ぐっと飲みこんだ。（ひとことも口をきかない男の子。だまって机にしがみついている子。給食はきちんと食べてるけれど、体育の時間は、ただ校庭につつまっている子）

こんな池上洋のうわさが心に残っていたからと、いうつもりだったけれど、ことばになかった。目の前で、まるくなっている池上洋が、ジュンには雨にぬれた鳩のように、あわれに見えたからだ。

ジュンと池上洋ととき子を残して、いつのまにか、あんなにたくさんいたヤジ馬たちが、坂の上や下へと散りはじめた。

「けんかは終わった終わった」

「もう見てもつままないよ。どうせ池上っていうやつは、口はきかないだろうし」

「チェッ！ ジュンの巴投げが見たかったのにさ」

「あっ、そうだ。ピアノ教室だった！」

いろいろの声を残して、ランドセルが音をたてて小さくなっていく。

「ジュンちゃん、さあ、行かない？」

あいかわらずジーンと下を向いたままの池上洋に、ジュンではなくて、とき子が腹を立てていた。